

「速 報」

## いわゆる“袈裟堂層”から産出したアンモナイト

村上 浩二\*

八代地方球磨川東方下深水北(日奈久帯)には、田代・池田(1987)により提唱された、いわゆる“袈裟堂層”が分布している。この“袈裟堂層”は田代・池田(1987)によれば、松本・勘米良(1964)によって八代層とされたもののうち、下深水北方に分布し、南方系の二枚貝化石やサンゴ化石などを特徴的に含む部分を分離し、新称を与えたものである。今回、いわゆる“袈裟堂層”から比較的保存状態のよいアンモナイトを採集したので報告する。

アンモナイト化石の産出地点は、袈裟堂から下深水に通じる林道わきの連続して地層の重なりが観察できるところである(図1)。化石を含む岩石は、比較的団塊状になる緑がかった層厚10 m前後の砂質頁岩である。この上位には白っぽい塊

状の砂岩、さらには砂岩と砂質頁岩の互層が重なる。この互層部分には、大型の三角貝とウミユリ化石の密集層を挟在する。地層は緩く西側に傾いていて、露頭東側の谷を隔てて急傾斜した下位の地層とは断層で接する。このアンモナイトを含む地層は日奈久帯に分布する日奈久層の向斜構造中軸部に近いことから緩傾斜を示すと考えられる。

アンモナイト化石を含む地層からは、ウニや合併の小型の二枚貝化石がまれに産出する。今回産出したアンモナイトを図2に示す。

アンモナイト化石の保存状態はよく、径が42 mmあり、この時代のものにしては比較的大きい部類に入る。圧密による変形もすくなく、断面の形状も認識できる。このアンモナイト化石は螺旋全体の形状や装飾の特徴から *Pseudohoplaceras* で

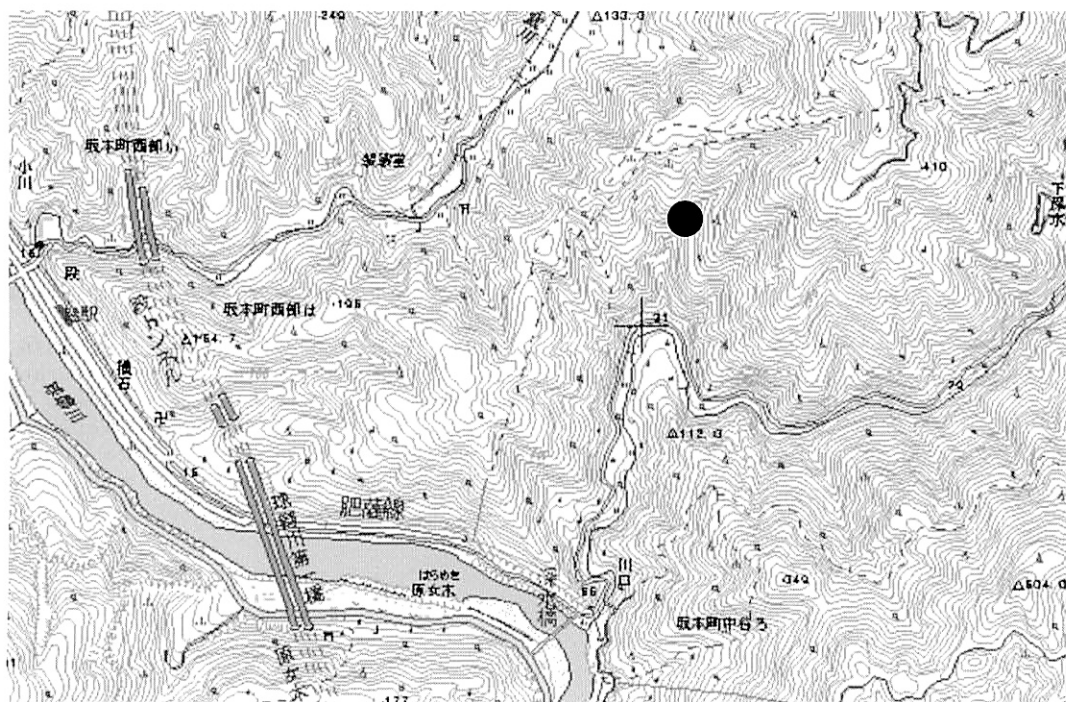


図1 “袈裟堂層”のアンモナイト化石産地(●印)。国土地理院発行 1:25000 地形図「坂本」の一部を使用。

2011年12月27日受付、2012年1月10日受理

\* 熊本市立錦ヶ丘中学校

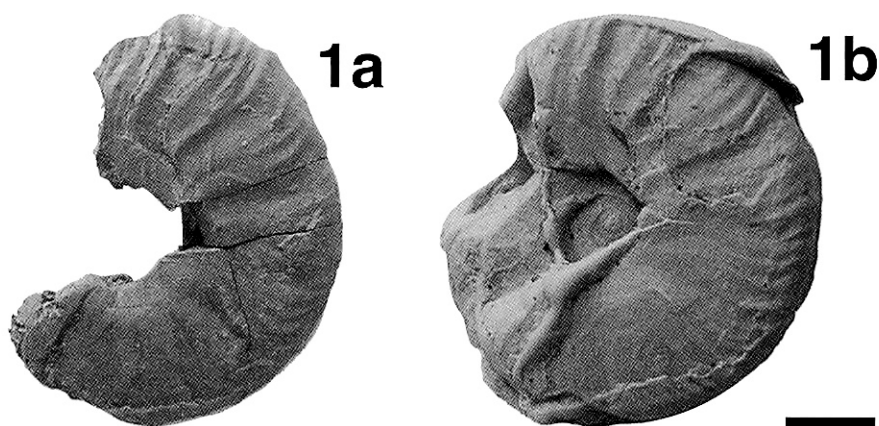


図2 “袈裟堂層”の *Pseudohaploceras* sp. 1a, 外形雄型側面観；1b, シリコンゴム外形雄型側面観。スケールバーは 1 cm.

ある。この属はバレミアンからアプチアンの化石として知られている (Wright et al., 1996)。

*Pseudohaploceras* は日奈久層の中では、球磨川沿いの採石場や日奈久東方の大坪川でも *Dufrenoyia*, *Deshayesites* などとともに産出している。この化石群は日奈久層の下部を特徴付けるものである。

この地域のいわゆる“袈裟堂層”と呼ばれる地層は、二枚貝とウミユリの化石を掃き寄せ状に含む砂岩と頁岩の互層から成る。この地層は村上 (2011) が報告した、日奈久層下部のアプチアンを特徴づけるアンモナイトを含む層準の上位に整合で重なっている。従って、この層準は日奈久層の中部層に相当すると考えられる。

このアンモナイト包含層の上位の大型の三角貝 (おそらく *Pterotrigonia*) を含むウミユリ化石の密集層がこの林道にも露出しているが、この化石産地は、田代・池田 (1987) の下深水北方のいわゆる“袈裟堂層”の化石産地 Loc. 10 に相当すると考えられる。

日奈久帯の下部白亜系は日奈久から今泉、下深水、九折、小原と東ほど古い時代の堆積物が分布する構造を示しており、袈裟堂から下深水にかけては日奈久層の中部層が向斜構造を呈していると解釈できる。以上のことから、田代・池田 (1987) が提唱したいわゆる“袈裟堂層”は日奈久層の一部と解釈することが妥当である。

## 文 献

- 松本達郎・勘米良亀齡, 1964: 日奈久. 5 万分の 1 地質図幅説明書, 147 pp. + 27 pp. 地質調査所.  
 村上浩二, 2011: 八代 (日奈久帯) 川口・下深水北の下部白亜系層序. 熊本地学会誌, pp. 12-13.  
 田代正之・池田昌久, 1987: 熊本県八代山地の下部白亜系、高知大学研報, no. 36, pp. 71-91  
 Wright, C. W., Calloman, J. H., and Howarth, M. K., 1996: Treatise on Invertebrate Paleontology, Part L revised, Mollusca 4, Cretaceous Ammonoidea: Boulder, Colorado, and Lawrence, Kansas, The Geological Society of America Inc. and The University of Kansas Press, 362 pp.